

|         |  |
|---------|--|
| 氏名      | 金村 優子  |
| 学位の種類   | 博士(美術)   |
| 学位記番号   | 第115号  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当   |
| 論文題目    | 大学の「内なる国際化」のための環境デザイン<br>～大学における異文化協働学習をとおして～                |
| 審査委員    | 主査 教授 藤本 英子<br>教授 田島 達也<br>教授 堀口 豊太<br>准教授 玉井 尚彦<br>講師 坂東 幸輔 |

## 論文の要旨

本論文は、大学の「内なる国際化」が学内の異文化コミュニケーション力の育成、ならびに、異文化理解を向上させるのかについて、日本出身者と外国人留学生の異文化協働学習をとおして、その学びの効果と環境形成の方法を論じる。

日本はこれまでにない勢いで国際的な人の移動が拡大している。それに伴い日本国内では多様な文化背景を持つ人々との接触が日常化し、文化の違いやコミュニケーションの齟齬が原因となる誤解やトラブルが顕在化し始めている。この現状において、日本国内では、異文化コミュニケーション能力と異文化への見識を併せ持つ人材育成が喫緊の課題である。そこで、本論文は、日本国内における外向きに偏った国際化教育を内向きへと転換させる教育環境形成の方法を提案する。そして、学内における異文化間の接触経験を踏まえた多言語コミュニケーション能力の育成、ならびに、異文化への関心と理解を促進させる学習環境のモデル化を目指す。

本論文の構成は3部構成になっている。第1部(理論編)は3つの章で編成されており、第1章では、人が創造してきた文化と環境の関係について、「環境のアフォーダンス」としての場がもつ力の視点から論じる。第2章では、本稿が焦点化する大学の「内なる国際化」の現状を明らかにする。第3章は、海外の大学生を受け入れている郷土伝統文化活動の事例を取り上げ、人形浄瑠璃文化を通じた異文化間の「対話」と「協働」の学びの効果を示す。

続く第2部(実践編)では、第1部で得られた仮説に基づく7つの研究を行う。第1章と第2章は、日本の大学の「内なる国際化」に大きな影響をもたらせる短期留学生に着目したアンケート調査を行う。第3章から第5章では、大学の「内なる国際化」が、教育プログラムやその学習環境とどのように関係づけられるのかについて解明する。第3章では、日本出身の大学生と短期留学生の交流の実態を地域のイベントを通じて明らかにする。第4章では、短期留学生の地域参加の手法と

彼/彼女らが地域に及ぼす影響について、そして、第5章では、日本出身の在校生と短期留学生との協働学習が相互のコミュニケーション能力や異文化理解にどのような影響をもたらせるのか、学内の異文化交流への影響についても検討する。第6章と第7章は、日本文化学習と和室の関係について検討を行う。第6章では、和室を教室として使用する効果について論じ、第7章では、和室を教室として利用する際の空間利用法について、パーティションを用いた仕切りの最適化を検討する。

そして、第3部は、第2部の第1章から第7章までで得られた主要な知見をまとめて本論文の総括である「WANOB<sup>アノバ</sup>A」の提案とした。「WANOB<sup>アノバ</sup>A」は、大学の国際化教育を通じて多様な学生間の異文化協働学習の場とその学習プログラムを包括的に体系づける教育環境形成の方法である。

「WANOB<sup>アノバ</sup>A」の実行は、日本出身の在校生と外国人留学生、さらに、大学周辺の地域の人たちの異なる三者を関係づける学習プログラムと実践的な活動で得られた経験を効果的な学びへと導くための3つの学びの場 — 伝統的な教室、和室、地域 — を使い分けることが重要であることを示した。

検証実験では、「WANOB<sup>アノバ</sup>A」の実践を通じて短期留学生の日本語学習が動機づけられ、日本文化への理解が深まった。また、日本出身の在校生と短期留学生の異文化協働学習の場が拡大し、“言葉が通じなくても何とかなる”という経験は、学生らの多言語コミュニケーションに対する姿勢を変化させた。そして、対話を通じた相互理解を深め、授業外での交流を進展させた。一方、地域の学びの場では、大学周辺の地域コミュニティと多様な文化背景を持つ学生らの「対話」と「交流」の機会が創出され、それをきっかけとして地域コミュニティ内では、日本語以外の言語と異文化への学習に関心が高まった。外国人留学生らは、地域活動を通じて実用的な日本語を習得、日本文化体験の場を得た。日本出身の学生らもまた日本の文化性への気づきや地域文化に目を向ける機会を得た。

以上の結果から、「WANOB<sup>アノバ</sup>A」による実践的な学習の積み重ねは、日本出身の在校生と外国人留学生の多言語コミュニケーション力の育成と異文化理解を深める。そして、学内の国際交流を活性化させ、大学の「内なる国際化」を促進させる。それに対して大学周辺の地域コミュニティでは、多様な文化背景を持つ学生らとの「対話」と「交流」が地域の国際化への貢献につながることを示された。

## 審査結果の要旨

金村優子氏の研究テーマは

『大学の「内なる国際化」のための環境デザイン～大学における異文化協働学習をとおして～』である。

主査は藤本が担当、副査は田島達也先生、堀口豊太先生、坂東幸輔先生、玉井尚彦先生である。

(研究者について)

金村氏は日本の大学卒業後、イギリスへの留学を経て、日本でデザイン、教育関連の事務所を営みながら、現在日本の3つの大学などで「日本文化と社会性に関連する科目」の教育にあたっている。

金村氏は留学経験および日本での教育経験から、研究テーマの課題に至った。

(研究の背景と意義)

今回の研究は、これまでの環境デザインにある、「建築を作る」「都市計画を行う」といった成果を提示するものではない。

金村氏がこれまで行ってきたのは、日本の大学における留学生の教育であった。

現場で従事する中で、それが持つ大きな可能性と現状の問題点を感じつつも、この分野が様々な専門性の狭間にあり、研究が極めて乏しい事に気付いた。

そこで現状の問題を整理するとともに、現在の大学教育の現場に存在する課題の改善のために環境デザインの視点から、「WANOPA」という提案を行うに至った。

交易や戦争に絶えず晒されてきた大陸にある文化に比べ、島国にあった我が国の文化は周囲にある海域により保護されてきた。

それによって、日本人が自らの文化について他に向けて言語化し説明する必要は少なかった。

このような歴史を抱える日本における国際交流や文化理解の土壌は、未だに浅い。

そのような背景を踏まえると、将来我が国に滞在する短期留学生の日本文化理解を促進する上で、金村氏の研究の根底にある問題意識は重要な位置を占める。

(論文内容の紹介)

本論文は3部構成となっている。第1部は理論編として、

第1章では大学の「内なる国際化」の教育環境に和風建築の活用が有意義であること、

第2章では日本の国際化教育の現場をデータなどから読み解き、「内なる国際化」を促進させる教育環境の条件を示している。これを踏まえ

第3章では、富田人形浄瑠璃の事例を分析し、4つの学びの場の概念を整理している。

第2部は実践編として、

第1章では短期留学生へのアンケートから、

第2章では日本の映像を使った実験、

第3章では地域活動への参加による異文化交流の実践、  
第4章では短期留学生の地域活動による実践、  
第5章では大学内での異文化協働学習の実践を行いその結果を分析整理している。  
第6章では日本文化学習の和室洋室での実践、  
第7章では和室で屏風の活用を実践し、これらの度重なる実践から、その効果を考察している。  
第3部は第2部の実践から導いた「WANOBA」の提案を行う、  
第1章で「WANOBA」学習プログラムの提案を行い、  
第2章では2つの大学において行った「WANOBA」の実証実験について、  
第3章でその結果を分析考察することで、最終効果を検証している。

(評価ポイント)

金村氏は、学内と学外の和室を使った効果的なプログラムなどを組み合わせた「WANOBA」という提案を行っているが、この研究の特性と評価される点は以下の3つである。

#### 1 度重なる実践からの提案の導きである

先行研究で位置付けが困難であったトピックに挑み、詳細な実験結果を基に一定の方向性を示した点は意義深い。

金村氏の教育の実践に基く大量の調査と、研究に費やされた言葉や参考画像の数は多く、研究の進んでいない分野において大きな進歩をもたらすであろう。

#### 2 日本の学生の「内なる国際化を進める」というタイムリーな課題への提案である

今日、留学生を対象としたプログラムはどの大学でも行っているが、日本の在學生と関係なく行われているケースが非常に多い。

そのため日本体験の一つとして、留学生に和の空間で何かをさせるプログラムを入れることもよくある。

また、留学生と日本の学生を同じ教室に集めて授業をするだけでは十分な交流は生まれない。

そこで金村氏が注目したのが和室だった。

和室は外国人の留学生にとって、日本の映画やマンガなどを通じて見知ってはいるが体験したことがない空間である。

しかし金村氏のユニークな点はここからである。

和室を単にエキゾチックな体験に終わらせるのではなく、和室が持つ独自の特性を考察し、それを活用することで、通常の教室にはない教育効果を上げられることを、実証したのである。

具体的には、和室という平らでリラックスできる場で留学生と日本人学生を同じグループにした活動をさせると、通常の教室より距離が縮まり、コミュニケーションが活性化することを実証した。

つまり、留学生の日本理解と日本人学生の異文化理解という二つの課題が、和室という環境を活用することで、同時にしかも高度に達成できるという。

和室に着目して、短期留学生に日本の目に見えない文化を伝えるという研究は、多くの外国人が日本に来て住む現代に、日本の学生の「内なる国際化」を進める上でのチャンスでもある。

### 3 環境デザイン分野からみた研究の位置付け

論文の中で金村氏は、自らが教える大学において、一連の「WANOBA」教育を行いその効果の検証を行っている。

しかしそれは固定化されたプログラムというよりは、ユニークな場とイベントを組み合わせるメソッドであり、まさにそれが環境のデザインであるという。

環境デザイン・教育・言語・文化といった複合的なテーマを取り扱った大変意欲的な研究である。

(今後の実社会での効果、今後の期待)

今回の提案は、大学の現代建築内に設置された畳の大広間を活かした短期留学生の文化理解を促す方法の研究が中心となっているが、様々な大学や交流の機関が活用する際には、その場に応じて柔軟に取り入れることが可能であり、逆に、これから留学生教育を改善していこうとする大学にとっては、有効な指針として活用可能なものと言える。

交流の双方向性を明確に意識し、日本の学生が「異文化出身者に対して無関心なのではなく、単に異文化出身者との関わり方を知らないだけ」といった気付きから、「言葉が十分に通じ合わなくても、何とかなる」という発想に着目した点は重要である。

その視点で捉えて公開審査では、個人が日本から海外に行く際に有効な国際交流への応用の可能性も示唆された。

海外で「通じなくても話さなければ」という状況に置かれたとき、日本への短期留学生と同様に積極的に文化交流を望む態度で臨めるか、その障壁となりうるものは何であるかなどである。

それにより多様な「発見」が予想されるが、それらの整理でさらなる実験デザインに結び付けられるであろう。

(最終評価)

今後の金村氏の研究は、大きな発展の可能性を秘めている点で本論文を評価したい。

論文中、示された多くの事例が、記号で大学名が紹介されていることでわかりにくい点は、公開での改善が求められるとともに、最後の提案のさらなる具体的な展開の可能性を、継続研究として望むが、結論として、この論文は豊富な経験とユニークな視点によって構成され、オリジナリティーがあり、現今の日本の大学教育に寄与するところも多い優れた内容を有すると言える。

よって本学の博士課程論文として十分な水準にあると考え、審査員による評価で合格とする。